

第5章 水稻直播栽培 武勇伝!!

イネの出芽前ラウンドアップ処理ができるまで

間島保昭

それは1本の電話から始まりました。直播の話聞きにいかないと誘われ、気が付けば予定にない乾田直播の作付が始まりました。当時の栽培方法は、催芽粉をカルパー粉衣しては種し、湛水処理で雑草の発芽を抑制させつつイネを発芽させました。この当時の一般的な方法では、カモに食われ発芽不良に悩まされ「我慢」の時期を過ごしました。

その後、豊里農業経営活性化協議会直播部会を結成したことで、直播栽培の試験が活発化し、レーザーレベラーや播種機の導入や集中管理孔を活用することによって発芽率が安定しました。また、浅水管理や乾籾は種などの様々な栽培技術が発見されたことで生育は安定し、作付面積も徐々に拡大していきました。

しかし、湛水処理を控えることにより、イネの発芽率が向上する一方で我が家ではスズメノカタビラがほ場一面にはびこり、仲間の足を引っ張る事になりました。

当時の齊藤普及員の指導の下、肥料と除草剤の様々な試験を積み重ねた中で、ラウンドアップの出芽前処理という可能性に辿り着きました。農薬登録に向けた試験を実施するためのほ場提供者に選ばれたのは、雑草被害の実績があった我が家で行うことになったのは言うまでもありません。

実施内容は、10区画のほ場に対しては種後より2日間隔でラウンドアップを散布、その後、葉害の限界点を探るために発芽後のイネにも散布しました。見事にイネにも効いたとても綺麗な10区画のほ場が出来上がりましたが、この試験によってイネの出芽前ラウンドアップ処理という除草体系が生まれました。

毎年様々な試験に取り組んできた仲間がいたからこそ、今があると思います。これから水稻直まき研究会が更に充実し、会員の一人一人の経営に活かされる事を願っております。

果てしなきチャレンジ！

新 田 慎太郎

水稲直播を始めて早17年が経ちますが、振り返ると様々な試験を行ってきた事が思い出されます。

中でも印象的なのは、当時直播に向く品種が限られていたので、出来れば既存の一般的な品種を作付けしたかったのですが、やはり北海道では熟期の問題が付きまといます。

ある日ふと大豆畑を見ていると、野生生えの稲が数本立っていて、「ひょっとしたら小麦のように前年初冬には種すれば雪解けと同時に芽が出て稲が稔るのではないか」と錯覚(笑)して直播稲の初冬播き栽培を試してみました。

2年間の試験結果は、前年に出芽した芽は翌年消えていき、根雪直前に蒔いた種は春に出芽せず、思い通りの姿にはなりませんでした。

今後チャンスがあればより自然な状態(収穫直後の未乾燥状態の種子)で懲りずにやってみたいと思います。

また、米のタンパク値について「穂数を増やして土中の養分を分散させれば低タンパク米を生産出来ないか」とは種量を反当たり30kgは種を試しました。

結果は、大きな倒伏もせず穂数の確保は出来たのですが、期待通りのタンパク値にはならず慣行栽培と同じ高タンパク米になりました。恐るべし泥炭の地力よ。なんぼチツソ放出するのですか(笑)

このような無謀な試験を行ってきましたが、これが無駄だったとは思っていません。むしろトライ&エラーが全道一の直播団地岩見沢の推進剤だと思っています。

技術の発展にはゴールはありませんので、これからも犠牲者友の会会員として励んでいきたいと思います。

目指せ！1トン穫り&タンパク6.8%以下。

普及員さん、JA職員さん引き続きお付き合いよろしく申し上げます(笑)

ノミニー液剤実用までの道のり…

JAいわみざわ 営農相談部門 江戸 知 明

平成26年春、とある日にクミアイ化学(以降クミ化)の担当者が事務所を訪れました。「『ノミニー液剤』という薬剤があって、これから北海道でも使われるように登録が取れる予定で、ノビエやスズメノカタビラにも効きます！」と試験依頼がやってきました。

当時研究会の副会長であった濱本氏のほ場の端の方に試験枠を設置し、散布薬量・散布日・散布水量を分けて試験を実施しました。

薬剤の効果はテキメンで、ノビエ・スズメノカタビラのみならず、広葉雑草にもよく効いてくれました。しかしながら、イネにも良く効いてくれました…。

12月に試験検討会を行い、効果についての報告があったものの、薬害の懸念があるためまだ販売できないとのこと。

翌年1月末に三役+事務局でクミアイ化学札幌支店を訪問し、早々の販売開始の要請をかけてきました。三役からの「契約書も書く！」との気持ちの入った要請と現地で実施したデータの提供を行うということで了承され、クミ化からは「契約書については信頼関係の問題なので必要とはしません！」との声を頂き、翌春からの販売につながりました。

JAいわみざわ管内のみの限定販売として販売が開始され、様々な事例が確認されました。意欲的な生産者の協力もあり(意図せずそうなったほ場もありあましたが)、散布したところとそうでないところの差も見させて頂きましたし、噴口よっての効果の差も報告を受けました。

アンケート調査にもご協力頂き、調査結果から生育回復に向けた追肥の提案もできました。ただ、効果が今一つ感じられないという声もあったり、散布後に低温が続くと効果が出てくるのに時間がかかるという事例も確認されています。薬害が嫌だという声もあるため、非常に使い方の難しい薬剤とは思いますが、直播栽培における除草剤の選択肢を広げてくれた薬剤だと認識しています。

生産者・関係機関のみなさんご協力の元、成り立っているものなのだと改めて感じさせてくれた一幕でした。